

# 古英語 *aslidan* とラテン語 *supplantari* について

石 原 覚

## I

以下は、共にウルガータ (*Vulgata*)<sup>1)</sup>の詩篇からの引用である。前者の、神の命令に忠実であり続けようとするダビデの意思が表明された一節では、「動かす、揺する」などの意味を表す動詞 *movere* の受動形 *moveri* が用いられ、後者の、同じく神に忠実な者についての一節では、「足をすくう、<sup>つまず</sup>躓かせる」を意味する動詞 *supplantare* の受動形 *supplantari* が用いられている。

- (1) *perfice gressus meos in semitis tuis ut non moveantur vestigia mea* (Ps 16:5)<sup>2)</sup>  
(我が歩みをあなたの道において完全になし給え、我が足取りが揺らぐことのないように。)
- (2) *lex Dei eius in corde ipsius et non subplantabuntur gressus eius* (Ps 36:31)  
(彼の神の律法が彼の心の中にあり、彼の歩みが躓く(躓かされる)ことはないであろう。)

次に引用したのは、上記2箇所に対応する古英語の散文訳詩篇の箇所であるが、ここで注目されるのは、(1)の *moveri* と (2)の *supplantari* の両方が、「滑る」を意味する動詞 *aslidan* により訳されている事実である。

- (3) *Gerihht, Drihten, mine stæpas on þine wegas þæt ic ne aslide þær þær ic stæppan scyle.* (PPs (prose) 16.5)<sup>3)</sup>  
(主よ、我が歩みをあなたの道へと真っ直ぐに向け給え、私が、歩むべきところで、滑ることのないように。)
- (4) *Seo æ his Godes bið on his heortan, and ne aslit his fot.* (PPs (prose) 36.31)<sup>4)</sup>  
(彼の神の律法が彼の心の中にあり、彼の足は滑ることがない。)

G. Hoberg は (2) を「……彼の足は躓くことがない」(“... und seine Füße straucheln nicht”)<sup>5)</sup>と訳し、ここの *supplantari* が「この関連では、16:5の *moveri* と同様」(“in dieser Verbindung soviel als moveri 16, 5”)<sup>6)</sup>であると解釈している。

果たして Hoberg が言うように、これらの箇所の *moveri* と *supplantari* は

同等に扱われるべきなのであろうか。本稿では、*aslidan*、*moveri*、そして *supplantari* の用法を調べることを通じて、(1) の *moveri* と (2) の *supplantari* を共に *aslidan* で表現するこの訳し方が、妥当なものと言えるのかどうかについて考えてみたい。

## II

ラテン語で、*aslidan* のごとく、「滑る」の意味を表す代表的な動詞は *labi* である。本章では、*aslidan* と *labi* が基本的用法を共有し、しばしば前者が後者を訳すのに用いられることを示そう。

まず *aslidan* は、次の (5)(6) におけるごとく、人間を主語として、転倒（転落）するさまを表すのに用いられる。(6) では転落する先の場所が示されている。

- (5) þurh ða fandunge we sceolon geðeon. . . gif we hwær *aslidon* arison eft þærrihte. & betan georne þæt ðær tobrocen byð. (ÆCHom I, 11 268.72)<sup>7)</sup>

(試みにより我らは成長するであろう、……どこで滑ろうと、すぐに再び起き上がり、そこで壊れたものを熱心に直すのならば。)

- (6) Min drihten god, ne læt me *aslidon* on þa synfullan eardungstowe þeah mine gewyrhta þus wace syn for minum gemelystum. (Conf 9.3.1 12)<sup>8)</sup>

(我が主なる神よ、私を罪深い住みかに滑り落とし給うな、我が行跡が、我が怠慢故にかくも貧弱なものであろうとも。)

次いで *aslidan* は、以下の (7) におけるごとく、足を主語として用いられる。

- (7) ufone sceal ðæt heafod giman ðæt ða fet ne *asliden* on ðæm færehte, forðæm, gif ða fet weorðað ascencte, eal se lichoma wierð gebiged, & ðæt heafod gecymð on ðære eorðan. (CP 18.131.25)<sup>9)</sup>

(頭は上から、足が進むとき滑らないように注意する必要がある。それは、もし足が躓いたら、体全体が曲がって、頭が地面に着いてしまうからである。)

*labi* も、次の (8) におけるように、人間を主語に、足を踏み外すことについて用いられる。

- (8) adde hos praeterea casus, aulaea ruant si, ut modo; si patinam pede *lapsus* frangat agaso. (HOR. sat. 2, 8, 72)<sup>10)</sup>

(こうした失態に加えて、さきほどのごとく、壁掛けが落ちるのでは

ないかとか、召使が足を滑らせて皿を割るのではないかと [あなたは思い悩む]。)

また *labi* は、次の (9) に見られるごとく、歩行を主語とすることがある。

- (9) ... si qua sub uberibus plenis ad funera natos ipsa gradu *labente* tulit madidumque cecidit pectus et ardentis restinxit lacte favillas. (STAT. silv. 5, 5, 16)<sup>11)</sup>

(豊かな乳房のもと、自ら息子たちを葬儀へとよろめく足取りで運び、張った胸を打ち、乳で燃える灰を消したことがあるなら、……)

以上示したごとく、*aslidan* と *labi* は人間の歩行をめぐる同様の使われ方をするため、以下の (10)~(12) に見られるごとく、前者は後者の訳語として用いられる。(以下本稿では、古英語とラテン語の対応関係を例示する際には、このように古英語訳とラテン語原文を並べて引用する。) 次の (10) では、人間を主語とする *labi* を訳すのに *aslidan* が用いられている。

- (10) soðlice þeos cunnung wæs in þære forecwedenan brygce, þæt swa hwylc unrihtwisra manna swa wolde ofer þa feran, he sceolde *aslidan* þær on þa þystran & þa fule stincendan ea, (GD 4 (C) 37.319.12)<sup>12)</sup>

(まことに先に述べた橋では、以下のような試みがなされていた——誰であれ悪しき者が、それを渡ろうとすれば、彼はそこから暗く悪臭を放つ川へと滑り落ちるはずであった。)

... ut ... in tenebroso foetentique fluuio *laberetur*, (GREG.MAG. Dial. 4.37.10)<sup>13)</sup>

(……彼は暗く悪臭を放つ川へと滑り落ちるはずであった。)

以下の (11)(12) では、それぞれ人間の足、馬の足を主語とする *labi* が *aslidan* により訳されている。

- (11) se þa þa he feran wolde ofer þa brygce, his fot wearð færinga *asliden*, & he wearð aworpen of þære brygce eallinga healfum þam lichaman (GD 4 (C) 37.320.8)<sup>14)</sup>

(彼が橋を渡ろうとすると、突然彼の足が滑り、まさに彼の半身が橋から投げ出された。)

Qui dum transire uoluisset, eius pes *lapsus* est, ... (GREG.MAG. Dial. 4.37.12)<sup>15)</sup>

(彼が渡ろうとすると、彼の足が滑り、……)

- (12) & þa þa he com in ðære ylcan cæstre beforan þære cyrcan þæs eadigan

apostoles sancte Petres, þa wearð his horse *asliden* se fot, & he þa mid horse mid ealle gefeoll, (GD 1 (C) 10.81.21)

(彼が、その町で、祝福を受けた使徒パウロの教会の前に来たとき、彼の馬の足が滑り、彼は馬もろとも転倒した。)

... equo eius pes *lapsus* est. Qui cum eo corrui, (GREG.MAG. Dial. 1.10.14)<sup>16)</sup>

(……彼の馬の足が滑り、彼はそれと共に転倒した。)

### III

(1)に見られる *moveri* は「揺らぐ」の意味を表し、以下の(13)におけるごとく、不安定な状態に置かれた物について用いられる動詞である。

(13) Ubi in primis dentes nonnumquam *moventur*, modo propter radicum inbecillitatem, modo propter gingivarum arescentium vitium. (CELS. 7, 12, 1<sup>A</sup>)<sup>17)</sup>

(ここ [口中] では、まず歯が、歯茎の衰弱により、また歯茎が干からびる疾患により、時にぐらつくことがある。)

この語はさらに、以下の(14)におけるごとく、人間についても用いられる。

(14) *obstupescite et admiramini fluctuate et vacillate inebriamini et non a vino movemini et non ebrietate* (Is 29:9)

(お前たちは、茫然とし、驚嘆せよ。揺らめき、よろめけ。お前たちは酔うが、葡萄酒によってではない。よろけるが、酩酊によってではない。) なお、(1)においては歩行について *moveri* が用いられているが、同種の例をウルガータ以外から以下の(15)に挙げる。

(15) *quicumque a deo recedit, statim saeculi fluctibus quatitur et moventur pedes eius.* (HIER. epist. 21, 8, 1)<sup>18)</sup>

(神から離れる者は、誰であれ、直ちにこの世の波に揺すられ、その足は揺らぐ。)

ここで(1)のギリシャ語原文、すなわち七十人訳聖書 (LXX)<sup>19)</sup>における対応箇所である以下の(16)を見てみよう。すると *moveri* は「揺する」を意味する動詞 *σαλεύειν* の受動形 *σαλεύεσθαι* に由来することがわかる。

(16) *κατάρτισαι τὰ διαβήματά μου ἐν ταῖς τρίβοις σου, ἵνα μὴ σαλευθῶσιν τὰ διαβήματά μου.* (Ps. 16(17).5)

(我が歩みをあなたの道において完全になし給え、我が歩みが揺らぐことのないように。)

この *σαλεύεσθαι* は、*moveri* と同じく、「揺らぐ」の意味で、しっかりと固定されていない物について用いられる動詞である。次の (17) はその典型例である。

(17) καὶ ὄνυχας δὲ θάττον ἀφίστησι σαλευθέντας ἐπιπλασθεῖσα. (Dsc. 5.3)<sup>20)</sup>

(また[その膏薬を]ぐらついた爪の上に塗ると、爪は早めに剥がれる。)

またこの語は、次の (18) におけるように、*moveri* 同様、人間を主語としても用いられる。

(18) ἐταράχθησαν, ἐσαλεύθησαν ὡς ὁ μεθύων, καὶ πᾶσα ἡ σοφία αὐτῶν κατεπόθη. (Ps. 106(107).27)<sup>21)</sup>

(彼ら [水夫] はかき乱され、酔いどれのようによろけ、彼らの知恵はすっかり飲み込まれた。)

ここで重要なのは、LXX の中で能動形の *σαλεύειν* が、有生物を主語として、他者の足について用いられているケースは、以下の (19) と、それとほぼ同一の内容であるもう一箇所 (2 *Ch.* 33.8) だけであるという事実である。

(19) καὶ οὐ προσθήσω τοῦ σαλεύσαι τὸν πόδα Ἰσραὴλ ἀπὸ τῆς γῆς, ἧς ἔδωκα τοῖς πατράσιν αὐτῶν, (4 *Ki.* 21.8)

(私がイスラエルの足を、私が彼らの父祖に与えた地から、動かすことは二度とないであろう。)

しかもこの文脈で *σαλεύειν* は、明らかに歩行の不調に関連して用いられているのではない。<sup>22)</sup> さらに、ウルガータの中で能動形の *movere* が、有生物を主語として、歩行の乱れについて用いられている例は見出されない。<sup>23)</sup>

従って、*σαλεύεσθαι* と *moveri* が足取りの不調について用いられる場合は、それらは共に受動形ではあるが、人間がその動作の主体 (agent) として想定されないと考えられる。<sup>24)</sup>

よって、足取りの乱れについて用いられた *moveri* は、受動形ではあっても、自動詞 *labi* と意味的に近くなる。以下の (20) では、*labi* に由来する名詞 *lapsus* (滑り) が用いられている。

(20) quoniam eripuisti animam meam de morte et pedes meos de lapsu ut placeam coram Deo in lumine viventium (Ps 55:13)

(我が魂を死から、我が足を滑りから、あなたが救ったからである、

生ける者たちの光の中で神に気に入られるようにと。)

以下は Haymo (853没)<sup>25)</sup>による (20) の解釈であるが、ここで *lapsus* の解釈に *moveri* が用いられているのは、*labi* (滑る) と *moveri* (揺らぐ) の関係の近さを示すものである。

“et pedes meos,” id est affectiones meas, eripies “de lapsu,” quia ibi nullo modo movebitur ad malum affectio mea,<sup>26)</sup>

(「我が足を」すなわち我が意思を、あなたは「滑りから」救うであらう。我が意思が決して悪へと揺らぐことがないであろうから。)

以上から、(3) および以下の (21) に見られるごとく、「滑る」の意味の自動詞 *aslidan* が、足のよろめきについて用いられた受動態の動詞 *moveri* を訳すのは、それが *labi* を訳すのと同様、自然なことであると言える。

(21) Gif ic þæs sægde, þæt min sylfes fot ful sarlice *asliden* wære, þa me mildheortnes mihtigan drihtnes gefultumede, þæt ic feorh ahte. (PPs 93.16)<sup>27)</sup>  
(我が足が甚だしく滑った、と私が言えば、力強い主の憐憫が、生き長らえられるよう私を助けた。)

si dicebam *motus* est pes meus misericordia tua Domine adiuuabat me (Ps 93:18)

(我が足が揺らいだ、と私が言えば、主よ、あなたの憐憫が私を助けた。)

#### IV

続いて、(2) のギリシャ語原文である以下の (22) を見てみると、*supplantari* の原語は  $\acute{\upsilon}\pi\sigma\kappa\epsilon\lambda\acute{\iota}\zeta\epsilon\iota\nu$  (足をすくう、躓かせる) の受動形の  $\acute{\upsilon}\pi\sigma\kappa\epsilon\lambda\acute{\iota}\zeta\epsilon\sigma\theta\alpha\iota$  であることがわかる。

(22) ὁ νόμος τοῦ θεοῦ αὐτοῦ ἐν καρδίᾳ αὐτοῦ, καὶ οὐχ ὑποσκεισθήσεται τὰ διαβήματα αὐτοῦ. (Ps. 36(37).31)

(彼の神の律法が彼の心の中にあり、彼の歩みが躓く (躓かされる) ことはないであろう。)

ここで注目すべきは、この受動態の動詞が、「足を取られる、躓く」の意味で用いられ、有生物の動作主と無縁な場合が見られる——つまりこの動詞の表す行為は他の人間により引き起こされるのではないケースが存在する——ことである。例えば以下の (23) では、無生物の動作主が示されている。

(23) Ἴδ', ὡς ὁ πρέσβυς ἐκ μέθας Ἀνακρέων ὑπεσκέλισται καὶ τὸ λῶπος

ἔλκεται ἐσάχρι γυίων· (APL. 4.307 (Leon.Tarent.))<sup>28)</sup>

(見よ、老人のアナクレオンが、酒に足を取られ、上衣を足まですり下げているさまを。)

また以下の2例においては、歩行の乱れは、主語の人間が置かれた状況・環境によりもたらされるのであって、誰か他者により引き起こされるのではない。よって、これらにおいて、この動詞に人間の動作主を想定することはできない。

(24) ὥσπερ γὰρ οἱ πολὺν χρόνον δεθέντες κἂν εἰ λυθείεν ὕστερον, ὑπὸ τῆς πολυχρονίου τῶν δεσμῶν συνηθείας οὐ δυνάμενοι βαδίζειν ὑποσκελίζονται, τὸν αὐτὸν τρόπον οἱ πολλῶ χρόνῳ τὸν λόγον σφίξαντες, . . . (Plu. 2.6e)<sup>29)</sup>

(長い間足枷をはめられていた者たちが、その後自由にされても、長い束縛の習慣から、歩くことが出来ず、足を取られるごとく、同様に長い間発話を抑制してきた者たちは、……)

(25) καθάπερ γὰρ οἱ μὲν δι' ὀλισθηρᾶς ὁδοῦ βαδίζοντες ὑποσκελίζονται καὶ πίπτουσιν, οἱ δὲ διὰ ξηρᾶς καὶ λεωφόρου ἀπταιστώ χρῶνται πρεΐα, οὕτως οἱ διὰ τῶν σωματικῶν μὲν καὶ τῶν ἐκτὸς τὴν ψυχὴν ἄγοντες οὐδὲν ἄλλ' ἢ πίπτειν αὐτὴν ἐθίζουσιν—ὀλισθηρὰ γὰρ ταυτά γε καὶ πάντων ἀβεβαιοτάτα— (Ph. 2.39)<sup>30)</sup>

(滑りやすい道を歩く者たちが、足を取られて倒れ、乾いた通りを歩く者たちが、躓かずに進むごとく、魂を肉体的・外的なものに沿って導く者たちは、それが倒れるということを悟らずにはおれない。そうしたものは滑りやすく、またあらゆるものの中で最も不安定だからである。)

では、問題の(22)の ὑποσκελίεσθαι はどうであろうか。注目に値するのは、ここでこの語はヘブライ語原典の「よろめく」<sup>31)</sup>を意味する動詞  $\text{טַמַּם}$  に対応していることである。従って、この ὑποσκελίεσθαι は、人間の動作主と無関係である——すなわち「躓く」の意味で現れているのであり、他者から引き起こされる転倒について用いられているのではない——と捉えることが可能である。

次に、以下の LXX における ὑποσκελίεσθαι の例について考えてみよう。

(26) διὰ τοῦτο γενέσθω ἡ ὁδὸς αὐτῶν αὐτοῖς εἰς ὀλισθημα ἐν γνόφῳ, καὶ ὑποσκελισθήσονται καὶ πεσοῦνται ἐν αὐτῇ· διότι ἐπάξω ἐπ' αὐτοὺς

κακὰ ἐν ἐνιαυτῷ ἐπισκέψεως αὐτῶν, φησὶν κύριος. (Je. 23.12)

(そのために彼ら [汚れた祭司と預言者] の道が、彼らにとって暗闇の中で滑りやすくなるが良い。彼らはそこで足を取られ、倒れるであろう。私が災いを、彼らに臨む年に彼らの上にもたらすであろうから、と主は言う。)

ここに見られる、道が暗闇の中で滑りやすくなる、という記述と良く似たものが、LXX では以下にも見出される。

(27) γενηθήτω ἡ ὁδὸς αὐτῶν σκοτός καὶ ὀλίσθημα, καὶ ἄγγελος κυρίου καταδιώκων αὐτούς. (Ps. 34(35).6)

(彼ら [私に災いを企てる者たち] の道が、暗く滑りやすいものとなるが良い、主の使いが彼らを追いかけて。)

Theodoretus (393頃～458頃) は、(27) について以下のように述べる。

Σκότος δὲ καὶ ὀλίσθημα τὴν κατάπτωσιν λέγει. Οἱ τε γὰρ προσπταίοντες, καὶ οἱ τὸν ὀλισθον ὑπομένοντες, καταπίπτουσιν.<sup>32)</sup>

(「倒れること」を彼は「暗闇」と「滑り」と呼ぶ。躓く者たちと、滑りを被る者たちは、倒れるからである。)

また Cassiodorus (477頃～570頃) は、ラテン語訳の同箇所について次のように記述する。

In contrarium uerti peccatoribus omnia postulauit, ut *uia* propria quae illis uidetur lucida uel fixa, cum in eadem delectabiliter commorantur, *fiat* illis tenebrosa, quam horreant *et lubrica*, ut in eadem diutius stare non possint;<sup>33)</sup>

(彼 [キリスト] は、すべてが罪人たちにとって不利になるように望んだ。それは、もし彼らがそこに喜んで留まるなら、彼らには明るく、また安定したものに見える彼らの「道」が、彼らがおののくような暗い、「そして滑りやすいもの」となり、彼らが最早そこに立ってられないようにするためである。)

これらの解釈に共通するのは、(27) で述べられているような、暗く滑りやすい道では、他者に躓かさされなくとも転倒が起こり得るという考え方である。従って、(27) におけると同じく「暗闇」と「滑り」が言及された (26) の ὑποσκελίζεσθαι は、「足を取られる、躓く」の意味であり、人間の動作主とは無関係であると捉えられる。

古ラテン語訳 (Vetus Latina) で (26) に対応する次の (28) では、ὑποσκελίζεσθαι は *supplantari* によって表されている。

(28) *Et propter hoc facta est uia eorum lapsinosa in tenebris et supplantabuntur et cadent in ea.* (ITALA Ier. 23, 12 (Cassiod. in psalm. 34, 6))<sup>34)</sup>

(そのために彼らの道が、暗闇の中で滑りやすくなり、彼らはそこで足を取られ、倒れるであろう。)

故に、*supplantari* にも ὑποσκελίζεσθαι と同じく、「足を取られる、躓く」の意味で用いられ、人間の動作主が想定されないケースが存在すると言える。また、以下の (29) におけるように、無生物が能動形の *supplantare* の主語となる例が見られる事実も、この動詞が受動態で用いられた場合、その動作主が必ずしも有生物であるとは限らないことを示唆している。

(29) *stultitia hominis subplantat gressus eius et contra Deum fervet animo suo* (Prv 19:3)

(人間の愚かしさはその歩みを躓かせ、彼はその心で神に対して激する。)

先に示したごとく、(22) の ὑποσκελίζεσθαι は、人間の動作主と無縁であると考えられ、従って、これを訳した (2) の *supplantari* も、(1) の *moveri* 同様、人間の動作主とは無関係であり、「躓く」の意味で用いられていると見なされる。この (2) の *supplantari* の捉え方は、I で示した Hoberg の解釈に、また以下の J. Niglutsch による (2) の後半の言い換えに通じるものである。

*pedes eius non vacillant = firmus stabit in quacumque conditione vitae suae.*<sup>35)</sup>

(彼の足がよろめくことはない＝彼の道がいかなる状態にあろうとも、彼はしっかりと立っているであろう。)

よって、(4) におけるごとく、自動詞 *aslidan* (滑る) が、受動態の動詞とはいえ人間の動作主とかかわりのない *supplantari* (躓く) を訳すのは、無理のない訳し方であると考えられる。

仮に (2) の *supplantari* をこのようにのみ捉えるのであれば、(1) の *moveri* と (2) の *supplantari* の両方が *aslidan* で表されている古英語訳は、共に人間の動作主と無関係であるこれら二つのラテン語動詞が平等に扱われている点で、ラテン語原文との間に矛盾はないと言える。

## V

ここで見過ごせないのは、能動形の ὑποσκελίζειν が、以下の (30) にお

けるように、人間を主語として「足をすくう、躓かせる」の意味で用いられる事実である。

(30) Κόνων δ' οὔτοσί καί . . . ἐμοὶ προσπεσόντες, τὸ μὲν πρῶτον ἐξέδυσαν, εἶθ' ὑποσκελίσαντες καὶ ῥάξαντες εἰς τὸν βόρβορον, οὕτω διέθηκαν ἐναλλόμενοι καὶ παίοντες, . . . (D. 54.8)<sup>36)</sup>

(そのコノーンと……は私に襲い掛かり、まず服を剥ぎ、次いで足を払い、泥濘に突き入れ、飛び跳ね、殴る、という仕打ちに及んだので、……)

次のLXXからの例(31)でも、*ὑποσκελίζειν* は人間を主語としている。

(31) φύλαξόν με, κύριε, ἐκ χειρὸς ἀμαρτωλοῦ, ἀπὸ ἀνθρώπων ἀδίκων ἐξελοῦ με, οἵτινες ἐλογίσαντο ὑποσκελίσαι τὰ διαβήματά μου. (Ps. 139(140).5)

(主よ、私を罪人の手から守り、我が歩みを躓かせようと企む悪しき者たちから私を救い給え。)

このように能動形の *ὑποσκελίζειν* が人間を主語とすることを念頭に置いて、次の(32)における受動形の *ὑποσκελίζεσθαι* を見てみたい。

(32) τοιαῦτα τῶν εὐσεβῶν τὰ τέλη· κἄν γὰρ κλιθῶσιν, οὐκ εἰς ἅπαν πίπτουσιν, ἀλλὰ διαναστάντες ὀρθοῦνται παγίως καὶ βεβαίως, ὡς μηκέθ' ὑποσκελισθῆναι. (Ph. 2.58)<sup>37)</sup>

(敬虔な者たちの行く末はこのようなものである。彼らは、たとえ屈ませられても、倒れきらず、立ち上がり、しっかりと堅く直立し、二度と躓く(足をすくわれる)ことはない。)

ここで *ὑποσκελίζεσθαι* が、人間の動作主と無縁に用いられている——「足を取られる、躓く」の意味で用いられている——という見方は可能ではある。他方で、この動詞にはここで人間の動作主が想定され、この語は「(誰かに)足をすくわれる、躓かされる」の意味で用いられている——なぜならここで話題にされているヨセフは他者から災難を幾度か被っているが故に——という見方もまた可能である。

R. Klotz のラテン語辞典が *supplantare* に「或人を足を下に置くことで倒す」<sup>38)</sup> の語義を与えている通り、この動詞も能動形では、*ὑποσκελίζεσθαι* 同様、人間を主語として用いられる。以下の(33)はその典型例である。

(33) Qui stadium, . . . currit, eniti et contendere debet, quam maxime possit, ut vincat, *supplantare* eum, quicum certet, aut manu depellere nullo modo

debet; (CIC. off. 3, 42)<sup>39)</sup>

(……競技場を走る者は、勝つためにできる限り努力し、奮闘せねばならないが、決して共に争う者の足を払ったり、彼を手で突き飛ばしたりしてはならない。)

次の (34) では、人間以外の有生物が、転倒を引き起こす主体として *supplantare* の主語となっている。

(34) *Calciati sint euangelico magisterio et armati pedes, ut cum serpens calcari a nobis et obteri coeperit, mordere et *subplantare* non possit.* (CYPR. epist. 58, 9)<sup>40)</sup>

(蛇が、我らに踏まれ、潰されかけても、噛み付いて躓かせることのないように、足に、福音の教えをもって靴を履かせ、防備を施すが良い。)

また次の (35) においては、受動形の *supplantari* が見られるが、ここでこの動詞は人間の動作主を伴い、よって明らかに「足をすくわれる、躓かされる」という受動的意味で用いられている。

(35) *... ut qui in persecutionis infestatione *subplantati* ab aduersario et lapsi fuissent ac sacrificiis se illicitis maculassent, agerent diu paenitentiam plenam* (CYPR. epist. 57, 1)<sup>41)</sup>

(迫害の混乱の中で、敵対する者により足をすくわれ、滑り、禁じられた供え物により自らを汚した者たちは、長い間十分に悔い改めるべきであると……)

以上のように、能動形の *supplantare* が人間 (有生物) を主語として現れること、またその受動形の *supplantari* が人間の動作主を伴うことに基づいて考えれば、次の (36) の受動形の *supplantari* を「足をすくわれる、躓かされる」の意味でとらえ、それに人間の動作主 (この場合は敵手) を想定するのは容易である。

(36) *ille, qui sanguinem suum vidit, cuius dentes crepuere sub pugno, ille, qui *subplantatus* aduersarium toto tulit corpore nec proiecit animum proiectus, qui quotiens cecidit, contumacior resurrexit, ...* (SEN. epist. 13, 2)<sup>42)</sup>

(自分の血を見、<sup>こぶし</sup>拳の下で歯を鳴らした者、足を払われ、全身で相手を受け、倒されても闘志を失わず、倒れるたびごとに一層しぶとく立ち直った者が、……)

## VI

前章において、受動形の *ὑποσκελίζεσθαι* と *supplantari* には共に人間の動作主を補うるケースが見出されることを示したが、問題の (22) と (2) においてはどうかであろうか。以下、中世のキリスト教著述家たちにより、問題箇所 *ὑποσκελίζεσθαι* と *supplantari* がいかに捉えられているかを見てみたい。

Theodoretus は以下の (22) の解釈において、*καταβάλλειν* (転倒させる) を伴う *ἐπιχειρεῖν* (試みる) の現在分詞を用いて、*ὑποσκελίζεσθαι* に人間の動作主が補い得ることを示す。

... Οὕτω γὰρ τὸ πρακτέον μανθάνων ὁ τῆς ἀρετῆς ἐραστῆς, ἀτρεμῆς μενεῖ καὶ ἀσάλευτος, τῶν καταβαλεῖν ἐπιχειρούντων περιγινόμενος.<sup>43)</sup>  
(……このように、徳を愛するものは、なすべきことを学び、転倒させようと試みる者たちを制して、動じず、揺るがずにいるであろう。)

Euthymius Zigabenus (11～12世紀) は次の (22) についての記述で、*ὑποσκελίζεσθαι* を、人間の動作主を明記した *ἐμποδίζειν* (妨げる) の受動形によって言い換えている。

Ἡ πρὸς Θεὸν ὁδὸς οὐκ ἐμποδισθήσεται, οὔτε παρὰ τῶν ὀρατῶν ἐχθρῶν, οὔτε παρὰ τῶν ἀοράτων· οὐδὲν γὰρ τῇ ἀρετῇ ἐμποδίσαι δύναται.<sup>44)</sup>

(神への道は、目に見える敵によっても、また目に見えない敵によっても、妨げられることはないであろう。何も徳を妨げることはできないからである。)

以下は Ambrosius (340?～397) による (2) の解釈である。ここでは、主語が人間 (エサウの弟ヤコブ) である能動形の *supplantare* が用いられていることから、(2) の受動形の *supplantari* に人間の動作主が想定されていることがわかる。

... ne eius subplantentur uestigia sicut Esau, quem propter gulae aviditatem frater subplantavit, ut caderet, atque in mortem uestigia eius effudit!<sup>45)</sup>

(……彼 [信仰心が厚く正しい者] の足取りが、その食い意地故に弟がつかずかせ、倒し、そしてその足取りを死へと転落させた、エサウのごとく、躓かされることのないように。)

下記は、Theodorus Mopsuestenus (350頃～428) によるギリシャ語の注

釈を、Iulianus Aeclanensis (380～455頃) がラテン語に翻訳したものの要約 (epitome) において、(2) に当たる部分であるが、ここで *supplantari* は、人間の動作主を伴う *impellere* (打つ) の受動形により表現されている。

In praestitutis instructus, stabit etiam si impellatur aduersis.<sup>46)</sup>

(彼は戒めを教え込まれており、敵対する者たちから打たれても、立っているであろう。)

そして次の Cassiodorus による (2) の解釈では、人間の主語に続く能動形の *supplantare* と、その後で記されたこの動詞の意味を説明する具体的描写は、彼が (2) の *supplantari* に人間の動作主が補えると見なしていたことを明らかに示すものである。

... Huius itaque *gressus supplantare* nemo praeualebit, quando iam et originale peccatum desinet et diabolus decipiendi licentiam non habebit. *Supplantare* enim dicimus plantis foueas praetendere, ne possit incedens firmum reperire uestigium.<sup>47)</sup>

(……よって誰もこの者の「歩みを躓かせる」ことはできないであろう、今や原罪が終わり、悪魔が気ままに欺くことができないであろうから。まことに、「躓かせる」とは、歩行者がしっかりとした足取りを得られぬよう足の前に罫を仕掛けることを言うのである。)

以上の解釈から、(22) の ὑποσκελίζεσθαι と (2) の *supplantari* は「(誰かに) 躓かされる」の意味で用いられており、<sup>48)</sup> これらに人間の動作主を補い得ることがわかる。<sup>49)</sup>

では次に、上に引用した Theodoretus、Euthymius と Cassiodorus が、(16) の σαλεύεσθαι と (1) の *moveri* をいかに捉えているか見てみよう。(Ambrosius の評釈と Iulianus の要約には該当箇所は含まれない。)

Theodoretus は次の (16) の解釈において、動作主を伴わない παρατρέπειν (逸らす) の受動形をもって σαλεύεσθαι を表現している。

Τκετεύω τοίνυν, μή παρατραπήναι μου τὸν σκοπόν.<sup>50)</sup>

(よって、我が目標が逸らされることのないように、私は懇願する。)

次に Euthymius は以下の (16) の解釈で、ἀποσφάλλειν (惑わす) と παρακινεῖν (逸らす) のそれぞれ受動形を用いて σαλεύεσθαι を言い換えているが、上記 Theodoretus 同様、これらの動詞には動作主を記していない。

Ἄνω μὲν ἄνόμασε διαβήματα τὰ τοῦ νοῦ κινήματα· κάτω δὲ, τὰ τοῦ σώματος. Οἷον τέλεια καὶ ὀρθὰ ποιήσον τὰ νοήματά μου ἐν τοῖς

προστάγμασί σου, . . . τούτων γὰρ τελειωθέντων, οὐδὲ αἱ διὰ σώματος πράξεις ἀποσφαλεῖεν ἄν. Ἡ κατάρτισαι τὰ διαβήματά μου, τουτέστιν, ἐνέργειάν μου πᾶσαν ἐν τῷ ὁδεύειν τὰς τρίβους σου, . . . ἵνα μὴ παρακινήθῳσι τοῦ προσήκοντος, μὴ παρὰ σοῦ καταρτιζόμενα<sup>51)</sup>

(まず彼は、心の動きを、次いで体のそれを、歩みと呼んだ。つまり、我が思考を、……あなたの掟において、完全かつ真っ直ぐになし給え。それが完全になることで、体の活動も惑わされることはないであろうから。換言すれば、我が歩みを、すなわち、あなたの道を辿る際の我があらゆる行動を、完全になし給え。……歩みが、あなたによって完全なものとなされず、適切なものから逸らされることのないように。)

そして Cassiodorus は以下の (1) の解釈において moveri を引き続き用いているが、その動作主はやはり示していない。

. . . Petit ergo Dominus Christus et gressus suos, id est actus humanos, et sua uestigia custodiri, quae fideles apostolos congruenter accipimus, in quibus . . . religionis catholicae signa dereliquit. Talis ergo sensus est: custodi me in mandatis tuis, ut imitantes me, minime moueantur abs te.<sup>52)</sup>

(……それ故、主キリストは、彼の「歩み」すなわち人間的行動と、……彼がカトリックの信仰の跡を残した、忠実な使徒たちを指すと解釈するべき、彼の「足取り(足跡)」とを、守るように求めている。よって意味は以下のようなものである——あなたの掟において私を守り給え、私を手本とする者たちがあなたから少しも揺らぐことのないように。)

Ⅲにおいて、歩行の不調について用いられた σαλεύεσθαι と moveri は、人間の動作主と無縁であることを示したが、上記の Theodoretus、Euthymius と Cassiodorus の解釈は、この見解を裏付けている。そして、(16) の σαλεύεσθαι ないしは (1) の moveri に対するのと、(22) の ὑποσκελίζεσθαι ないしは (2) の supplantari に対するのとでは、それぞれの動作主に関して、彼らの解釈の仕方が明瞭に異なることに気づく。すなわち彼らは、前者には歩行の乱れをもたらす者の存在を想定し、後者にはそれをしていないのである。

以上から、Ps 16:5 の moveri および Ps 36:31 の supplantari については、以下の二通りの捉え方が成り立つことがわかる。

1. どちらも受動形ではあるが、それぞれ「揺らぐ」「躓く」の意味で

用いられ、共に人間の動作主とは無縁である。

2. Ps 36:31 の *supplantari* は「(誰かに) 躓かされる」の意味で用いられ、人間の動作主とかかわりを持つ点において、Ps 16:5 の *moveri* と異なる。

従って、これらを共に「滑る」の意味の *aslidan* で表す訳し方は、1 の捉え方における二つのラテン語の共通点——歩行の乱れが共に他者により引き起こされるのではないこと——故に、妥当なものであると言える。しかしその半面、この訳し方は、2 の捉え方における両語の違い——歩行の乱れが一方は他者により引き起こされること——を反映しない、不十分なものであるとも言える。

## 注

- 1) R. Weber et al., *Biblia Sacra iuxta vulgatam versionem*, 5. Aufl. (Stuttgart, 2007).
- 2) 古英語のテキストの略記と引用の仕方は、原則として、*DOE* (A. Cameron et al., *Dictionary of Old English: A to G on CD-ROM* (Toronto, 2008)) に従い、ラテン語のテキストのそれは、原則として、同辞典または *TLL* (*Thesaurus Linguae Latinae* (Leipzig, 1900–)) に従う。なお、頭に括弧付の番号を振った、古英語、ラテン語およびギリシャ語の引用文中のイタリック部分は、すべて筆者によるものである。
- 3) J. W. Bright and R. L. Ramsay, *Liber Psalmorum: The West-Saxon Psalms, Being the Prose Portion, or the 'First Fifty,' of the So-Called Paris Psalter* (Boston, 1907).
- 4) (3) は *DOE*, s.v. *aslidan* 1.b に、足について (比喩的にも) 用いられた「滑る」 (“to slip”) の意味の *aslidan* / *asliden weorþan* の例として、ラテン語原文と共に挙げられている。
- 5) G. Hoberg, *Die Psalmen der Vulgata*, 2. Aufl. (Freiburg im Breisgau, 1906), p. 124.
- 6) Hoberg, p. 127.
- 7) P. Clemoes, *Ælfric's Catholic Homilies: The First Series, Text*, EETS s.s. 17 (Oxford, 1997). (5) は *DOE*, s.v. *aslidan* 2 の「道徳的に転落する、(罪などに) 陥る」 (“to lapse morally, fall (into sin, etc.)”) に挙げられている例である。
- 8) L.-G. Hallander, “Two Old English Confessional Prayers,” *Stockholm Studies in Modern Philology* n.s.3 (1968): 101. (6) は *DOE*, s.v. *aslidan* 1.a.ii に「(或物や場所の対格) へと滑り落ちる」 (“to slip, fall into (something / a place acc.)”) を意味する *aslidan* / *asliden weorþan in / on / innan* の例として挙げられている。
- 9) H. Sweet, *King Alfred's West-Saxon Version of Gregory's Pastoral Care*, pt. 1,

- EETS 45 (London, 1871). この *aslidan* は、ラテン語原文 GREG.MAG. Reg. past. 2.7.60 (B. Judic et al., *Grégoire le Grand: Règle Pastorale*, t. 1, SChr 381 (Paris, 1992), p. 222) の “haec procul dubio caput debet ex alto prouidere, ne a proeuctus sui itinere pedes torpeant, . . .” (頭は高所から、足が自らが進む道から離れて動きが鈍くなることのないよう、必ずこれ [真っ直ぐな進路] を心掛けねばならない。……) における *torpere* (不活発になる) を自由訳したものである。この箇所は *DOE*, s.v. *aslidan* 1.b に例として挙げられている。
- 10) H. R. Fairclough, *Horace: Satires, Epistles and Ars Poetica*, rev., Loeb Classical Library (LCL) 194 (1929), p. 244. (8) は *OLD* (P. G. W. Glare, *Oxford Latin Dictionary* (Oxford, 1982)), s.v. *labor* 6 の「足を滑らせる」 (“To slip (so as to lose one’s footing)”) に挙げられている例である。
- 11) D. R. S. Bailey, *Statius: Silvae*, LCL 206 (2003), p. 374. (9) は *TLL*, s.v. *labor* IA2aα の「足を踏み外す [生物およびその部分や行動について]」 (“[de animantibus eorumque partibus vel actionibus] quae vestigio falluntur”) のもと、「歩みについて、ほぼ *labare* (よろける)、*nutare* (揺れる) と同じ」 (“de gradibus fere i.q. *labare, nutare*”) に挙げられている例である。
- 12) H. Hecht, *Bischof Wærferths von Worcester Übersetzung der Dialoge Gregors des Grossen*, Bib. ags. Prosa 5, 1. Abt. (Leipzig, 1900; Nachdr. Darmstadt, 1965). (10) は *DOE*, s.v. *aslidan* 1.a.ii に挙げられている例である。
- 13) A. de Vogüé, *Grégoire le Grand: Dialogues*, t. 3, SChr 265 (Paris, 1980), p. 130.
- 14) (11) は次の (12) と共に *DOE*, s.v. *aslidan* 1.b に挙げられている例である。
- 15) De Vogüé, t. 3, p. 132.
- 16) A. de Vogüé, *Grégoire le Grand: Dialogues*, t. 2, SChr 260 (Paris, 1979), p. 104.
- 17) W. G. Spencer, *Celsus: On Medicine, Books VII–VIII*, LCL 336 (1938), p. 366. (13) は *OLD*, s.v. *moveo* 2c の「(物について) 動きやすい、ぐらついている」 (“(of things) to be liable to move, be loose”) に挙げられている例である。
- 18) I. Hilberg, *Sancti Eusebii Hieronymi Epistulae*, pars 1, CSEL 54 (Vindobonae, 1910), p. 119. (15) は *TLL*, s.v. *moveo* IA2cβ の「様々な行為により [身体部分が動かされる]」 (“[moventur partes corporis] vario usu”) のもと、「喩えて、足の不安定さについて」 (“in imag. de instabilitate pedum”) に挙げられている例である。
- 19) A. Rahlfs, *Septuaginta*, ed. altera (Stuttgart, 2006).
- 20) M. Wellmann, *Pedanii Dioscuridis Anazarbei De materia medica libri quinque*, vol. 3 (Berlin, 1914; Nachdr. Hildesheim, 2004), p. 3. (17) は H. G. Liddell and R. Scott, *A Greek-English Lexicon*, rev. by H. S. Jones, with a revised supplement (Oxford, 1996), s.v. *σαλεύω* I.1 の受動態の「(歯や爪について) ぐらつく」 (“of teeth or nails, to be loosened”) に挙げられている例である。ギリシャ語のテ

キストの略記と引用の仕方は、原則として、同辞典による。

- 21) (18) は J. Lust et al., *A Greek-English Lexicon of the Septuagint*, rev. ed. (Stuttgart, 2003), s.v. σαλεύω の受動態の「よろめく」(“*to stagger*”) に挙げられている例である。
- 22) その一方で、受動形の σαλεύεσθαι が歩行の不調について用いられているケースは、(16) 以外に、2 *Ki.* 22.37: καὶ οὐκ ἐσαλεύθησαν τὰ σκέλη μου (我が足が揺らぐことはなかった)、*Ps.* 37(38).17: καὶ ἐν τῷ σαλευθῆναι πόδας μου (我が足がよろめくとき)、72(73).2: ἐμοῦ δὲ παρὰ μικρὸν ἐσαλεύθησαν οἱ πόδες (だが我が足は揺らぎかけ)、93(94).18: εἰ ἔλεγον Σεσάλευται ὁ πούς μου (我が足が揺らいだ、と私が言えば) にも見出される。LXX の語句の検索には E. Hatch and H. A. Redpath, *A Concordance to the Septuagint*, 2nd ed. (Grand Rapids, 1998) を使用した。
- 23) その一方で、受動形の moveri が歩行の不調について用いられているのは、(1) のみならず *Ps* 72:2; 93:18 にも見出される。ウルガータの語句の検索には B. Fischer, *Novae Concordantiae Bibliorum Sacrorum iuxta vulgatam versionem critice editam*, 5 tom. (Stuttgart-Bad Cannstadt, 1977) を使用した。
- 24) その一方で、以下の *TLL*, s.v. *moveo* IA2cβ に挙げられている例のように、無生物ならば、歩行の不調について用いられた *movere* の主語となり得る——AVG. in psalm. 120, 5 (E. Dekkers et I. Fraipoint, *Sancti Aurelii Augustini Enarrationes in Psalmos CI–CL*, CCL 40 (Turnholti, 1956), p. 1789): Quare unde cecidit: superbia cecidit. Non ergo mouet pedem, nisi superbia; ad ruinam non mouet pedem, nisi superbia (何故彼 [悪魔] が落ちたのかを尋ねよ——彼は傲慢さ故に落ちたのである。従って、傲慢さ以外に足をよろめかせるものはない。傲慢さ以外に足を転落へとよろめかせるものはない)。
- 25) 以下生没年は T. Wittstruck, *The Book of Psalms: An Annotated Bibliography*, vol. 1 (New York, 1994) による。
- 26) J.-P. Migne, “Explanatio in omnes psalmos,” *Haymonis Halberstatensis Episcopi Opera Omnia*, PL 116 (Turnholti), col. 384C.
- 27) G. P. Krapp, *The Paris Psalter and the Meters of Boethius*, ASPR 5 (New York, 1932). (21) の moveri は、ÆCHom II, 28 227.203 (M. Godden, *Ælfric’s Catholic Homilies: The Second Series, Text*, EETS s.s. 5 (London, 1979)) の “gif min fot aslad. drihten ðin mildheortnys geheolp me” (我が足が滑れば、主よ、あなたの憐憫が私を助けた) においても *aslidan* により訳されており、後者は *DOE*, s.v. *aslidan* 1.b に例として挙げられている。
- 28) H. Beckby, *Anthologia Graeca, Buch XII–XVI*, 2. Aufl. (München), p. 468. (23) は、後続の (24)(25) と共に Liddell and Scott, s.v. ὑποσκελίζω I の「足をすくう、転倒させる」(“*trip up one’s heels, upset*”) の受動態の例に挙げられている。

- 29) W. R. Paton et al., *Plutarchi Moralia*, vol. 1, 2. Aufl. (Leipzig, 1974), p. 12.
- 30) L. Cohn, *Philonis Alexandrini Opera Quae Supersunt*, vol. 4 (Berolini, 1902; Nachdr. 1962), p. 59.
- 31) L. Koehler und W. Baumgartner, *Hebräisches und aramäisches Lexikon zum Alten Testament*, 3. Aufl. (Leiden, 1967–96), s.v. מַעַד qal: wanken.
- 32) J.-P. Migne, “Interpretatio in Psalmo,” *Theodoret, Cyrensis Episcopi, Opera Omnia*, ed. J. L. Schulze, PG (Patrologia Graeca) 80 (Paris, 1860; repr. Turnhout, 1977), col. 1109D.
- 33) M. Adriaen, *Magni Aurelii Cassiodori Expositio Psalmorum I–LXX*, CCSL 97 (Turnholti, 1958), p. 307.
- 34) Adriaen, p. 307.
- 35) J. Niglutsch, *Brevis Explicatio Psalmorum*, ed. quinta (Bauzani, 1923), p. 103. J. Knabenbauer (*Commentarius in Psalmos*, ed. secunda (Parisiis, 1930), p. 151) も (2) の後半について同様の解釈をしている——「『彼の歩み』はよろめくことがなく、彼は神の掟においてしっかりと進む」(“*gressus eius non vacillant; firmiter incedit in praeceptis Dei*”)
- 36) A. T. Murray, *Demosthenes: Private Orations L–LVIII, . . .* LCL 351 (1939), p. 132. (30) は Liddell and Scott, s.v. ὑποσκελίζω 1 に最初に挙げられている例である。
- 37) Cohn, p. 86. (32) は Liddell and Scott, s.v. ὑποσκελίζω 2. metaph. (比喩的) に受動態の例として (22) と並んで挙げられている。
- 38) R. Klotz, *Handwörterbuch der lateinischen Sprache*, 3. Aufl., 2 Bde (Braunschweig, 1879; Nachdr. Graz, 1963), s.v. *supplanto* では、NON. p. 36 (W. M. Lindsay, *Nonii Marcelli De Conpendiosa Doctrina Libros XX*, vol. I (Lipsiae, 1903), p. 52) における *supplantare* の言い換えの “*pedem subponere*” (足を下に置く) が引かれ、“Jmdn durch Unterstellen d. Beines niederwerfen” の語義が示されている。
- 39) W. Miller, *Cicero: De Officiis*, LCL 30 (1913), p. 310. (33) と後出の (36) は *OLD*, s.v. *supplanto* 1 の「足をすくう、躓かせる」(“To trip up, cause to stumble”) に挙げられている例である。
- 40) G. F. Diercks, *Sancti Cypriani Episcopi Epistularium*, CCSL 3C (Turnholti, 1996), p. 332. (34) と次の (35) は A. Blaise, *Dictionnaire Latin-Français des Auteurs Chrétiens*, rev. par H. Chirat (Turnhout, 1954), s.v. *supplanto* 1 の「(比喩的) 打ち倒す、道徳的に転ばせる」(“(fig.) abattre, jeter bas, faire tomber moralement”) に挙げられている例である。
- 41) G. F. Diercks, *Sancti Cypriani Episcopi Epistularium*, CCSL 3B (Turnholti, 1994), p. 301.

- 42) R. M. Gummere, *Seneca: Epistles 1–65*, LCL 75 (1917), p. 72.
- 43) Migne, PG 80, col. 1133C.
- 44) J.-P. Migne, “Euthymii Commentarius in Psalmos Davidis,” *Euthymii Zigabeni Opera Quae Reperiri Potuerunt Omnia*, t. primus, PG 128 (1864), col. 425B.
- 45) M. Petschenig, *Sancti Ambrosii Opera, Pars VI: Explanatio Psalmorum XII*, CSEL 64 (Vindobonae, 1999), p. 128.
- 46) L. de Coninck, *Theodori Mopsuesteni Expositionis in Psalmos Iuliano Aeclanensi Interprete in Latinum Versae Quae Supersunt*, CCSL 88A (Turnholti, 1977), p. 170. なお、この解釈および後続の Cassiodorus による *supplantare* の説明は、P. P. O’Neill (*King Alfred’s Old English Prose Translation of the First Fifty Psalms* (Cambridge, Mass., 2001), p. 236) も、問題の (4) の “ne aslit” および (2) の “non . . . eius” の関連で参照させている。
- 47) Adriaen, p. 338.
- 48) J. M’Swiney (*Translation of the Psalms and Canticles with Commentary* (London, 1901), p. 127) も (2) の *supplantari* を “. . . And his steps shall not be tripped up” のように「躓かされる」の意味で表している。
- 49) Augustinus (354~430) による (2) についての以下の記述も（ここでは *supplantari* ないしはその言い換えの動詞は用いられていないが）(2) の *supplantari* に人間の動作主が想定し得ることを示唆する——「よって彼は安んじて生きるが良い、さらに悪しき者たちの間で安んじて生きるが良い、さらに不信心な者たちの間で安んじて生きるが良い」（“*Viuat ergo securus, et inter malos uiuat securus, et inter impios uiuat securus* (E. Dekkers et I. Fraipoint, *Sancti Aurelii Augustini Enarrationes in Psalmos I–L*, CCSL 38 (Turnholti, 1956), p. 376)”).
- 50) Migne, PG 80, col. 968A.
- 51) Migne, PG 128, col. 208C.
- 52) Adriaen, p. 145. ここで Cassiodorus は *vestigium* を、原語の *διάβημα* (歩み) に則した、*OLD*, s.v. *uestigium* 4 の「歩行の際の足の動き、歩み」（“A movement of the foot in walking, step”）ではなく、1 の「足跡、(また複数で、人間または他の動物により残された) 痕跡」（“A footprint, (in pl. also) track (left by a human being or other creature)”）の意味で用いている。ちなみに Augustinus も以下の詩篇 16:5 の後半部についての解釈で、これと同じ意味で *vestigium* を使っている——「秘蹟と使徒の文書に、足取り (足跡) のごとく刻された、我が進行の跡が揺らぐことのないように。私に従おうとする者たちはそれを模範とし、尊重するはずである」（“*Vt non moueantur signa itineris mei, quae tamquam uestigia sacramentis et scripturis apostolicis impressa sunt, quae intueantur et obseruent qui me sequi uolunt* (Dekkers et Fraipoint, CCSL 38, p. 92)”). ここで *moveri* に動作主が示されることはない。

## On Old English *aslidan* and Latin *supplantari*

Satoru ISHIHARA

The Latin *moveri*, the passive of *movere* “to shake,” in *ut non moveantur vestigia mea* (Ps 16:5) “[perfect my steps in thy paths] that my footsteps may not falter” is rendered in the Old English prose translation by *aslidan* “to slip”: *þæt ic ne aslide þær þær ic stæppan scyle* (PPs (prose) 16.5) “that I may not slide where I should step”; so is the Latin *supplantari*, the passive of *supplantare* “to trip up,” in *et non subplantabuntur gressus eius* (Ps 36:31) “[the law of his God is in his heart] and his steps shall not stumble (or be tripped up),”: *and ne aslit his fot* (PPs (prose) 36.31) “and his foot slippeth not.”

The fact that the active *movere* used of dislodging feet with an animate subject is not instanced in the Vulgate suggests that the passive *moveri* used of faltering steps is not to be supplied with a human agent. And the passive *supplantari*, used in the sense “to stumble,” can occur where it is not necessarily to be supplied with a human agent, as in *facta est uia eorum lapsinosa in tenebris et supplantabuntur et cadent in ea* (ITALA Ier. 23, 12 (Cassiod. in psalm. 34, 6)) “their way became slippery in the dark and they shall stumble and fall on it.” The *supplantari* in Ps 36:31, derived from the Greek ὑποσκελίζεσθαι rendering the Hebrew meaning “to falter,” can be regarded as unconnected with a human agent, as well as the *moveri* in Ps 16:5; if we grasp the *supplantari* only in this manner, we can say that the Old English, where *aslidan* renders both the *moveri* and the *supplantari*, is not contradictory to the Latin.

On the other hand, it is possible for *supplantari* to mean “to be tripped up” and occur where a human agent can easily be supplied, as in *qui subplantatus adversarium toto tulit corpore* (SEN. epist. 13, 2) “who, having been tripped up, endured the adversary with the whole body.” And in his exposition Cassiodorus interprets Ps 36:31, using the active *supplantare* with the human subject, as: . . . *Huius itaque gressus supplantare nemo praeualebit* “. . . And so no one will be able to trip up his steps.” Thus the *supplantari* in Ps 36:31 can also be grasped in the sense “to be tripped up (by someone)” and, unlike the *moveri* in Ps 16:5, can be supplied with a human agent. We can, therefore, also say in conclusion that the *aslidan* used to translate not only the *moveri*

古英語 *aslidan* とラテン語 *supplantari* について

in Ps 16:5 but also the *supplantari* in Ps 36:31 does not reflect the difference of usage between these two passive verbs.